

<学会記事>3. 先天性アミノ酸代謝異常症 (Cystinuria)の歯科治療の麻酔経験(第1回東北大学 歯学会大会講演抄録)(一般講演)

著者	斎藤 浩太郎, 高木 幸人, 後藤 繁, 普天間 朝義, 斎藤 隆夫, 猪狩 俊郎, 手島 貞一, 菅野 重光, 山田 和祐, 高橋 善男, 田代 直也, 林 進武, 桜井 聡, 斎藤 峻, 神山 紀久男
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	1
号	1
ページ	82-82
発行年	1982-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/31069

いて報告したが、今回は病理組織学的所見を中心に報告する予定である。

3. 先天性アミノ酸代謝異常症 (Cystinuria) の歯科治療の麻酔経験

斎藤浩太郎, 高木幸人, 後藤 繁, 普天間朝義
斎藤 隆夫, 猪狩俊郎, 手島貞一 (口腔外科 2)
菅野重光, 山田和祐, 高橋善男, 田代直也
林 進武 (口腔外科 2); 桜井 聡, 斎藤 峻
神山紀久男 (小児歯科)

先天性腎性アミノ酸尿症の一つであるシスチン尿症は、尿路結石とそれに続発する種々の腎障害に加え、近年、神経系疾患との合併が注目されてきた。今回我々はシスチン尿症に点頭癲癇と知能発育不全を併発した患者の、う歯治療のための全身麻酔を経験した。患者は3歳8カ月の男子で、う歯は多発性で、 $C_1 \sim C_2$ の状態にあった。既往歴として、出生後仮死状態であったため5日間の酸素吸入療法をうけている。生後5カ月目に点頭癲癇の発作をおこし、本学医学部小児科において、シスチン尿症の診断をうけた。以後抗癲癇薬のフェノバルビタールとエトサクシマイルの投与をうけている。現在は知能発育不全も併発している。家族歴にはとくに問題となるべきものは認められない。う歯の治療のための全身麻酔は、酸素・笑気・ハロセンのバランス麻酔で行なった。麻酔中および麻酔後特に異常はなく、患者は翌朝無事に退院した。癲癇および知能発育不全を併ったシスチン尿症の麻酔管理上特に留意すべき点として、①麻酔前に原疾患・続発症の程度や知能発育不全の程度、および投与されている薬物の有無と種類を把握すること、②麻酔中から麻酔後にかけて脱水や電解質異常、酸・塩基平衡のアンバランスによるアシドーシスなどに留意し、尿路結石の形成を予防すること、③癲癇の発作を予防し、麻酔後回復期の鎮静をはかること、などが挙げられる。

4. X線による骨脱灰状況の判定：写真フィルムとシンチレーターとの比較

庄司 茂, 曾 美訪, 三浦祐司, 鈴木祐平
堀内 博 (歯科保存 1)

近年医療用X線で患者が被曝する線量を低下させる努力が求められている。口内法撮影はX線の検出にフィルムを用いており、ここに低線量化に対する一つの限界がある。X線マイクロビーム透過像撮影装置(MXA)は検出器にNaI結晶を用いたもので、微少線

量で透過像を得るための装置である。

骨の脱灰状況を定量的に測定する方法としては、これまでフィルム上の黒化度を測定する方法が利用されて来た。本研究は犬の顎骨より摘出した骨片を対象として、これを脱灰したときに得られるX線透過度の変化をフィルムとMXAを用い測定し比較したものである。

フィルム法では0.05 mmの銅板よりなる6段階のステップウェッジで黒化度の校正をした。デンシトメーターは光点径0.6 mmのものを自作して用いた。MXA法ではビーム径は約0.2 mm, 画素は128×128個であった。脱灰前後の骨片上の直線にそってフィルム法で黒化度を測定し、プロットすると比較的スムーズな曲線が得られ、明白な脱灰傾向が観察された。同一標本をMXAで測定した軌跡は脱灰傾向は示すものの、不規則な透過度の変動を重畳していた。この変動はMXAで測定に用いた線量が少ないために現われた統計的なゆらぎとともに、X線ビーム径が小さい為に生じた位置的変動によるものと思われた。今後は更に、線量、スポットサイズ、位置的再現性などに検討を加え、骨脱灰状況の定量的測定法を開発していく予定である。

5. 歯科をめぐる医事紛争の現状と問題

山田文夫, 押田茂實 (医学部法医)

医療事故や医事紛争が発生した場合には、1) 刑事責任、2) 民事責任、行政処分等の法的責任があるかどうか判断されることになり、これらの中で最も表面化し易いのは損害賠償を要求する民事責任をめぐる問題である。医療行為はもともと「重大な危険を内包する行為」であるため、医療従事者は一般人よりも格段に注意深くなければならない。

医療に関する民事判決は554例あり、民事裁判で有責とされ損害賠償金支払を命じられた判決は、248判決であり、有責率は44.8%であった。一方、刑事裁判では、普通の事件の場合99%以上有罪になるが、医事裁判では、84%が有罪になっている。

医科領域の判決は民事11件、刑事6件(11判決)みられている。民事11件のうち3件で有責となっているが、判決額は比較的少額であり、その内容をみると歯科治療中の舌損傷や抜歯・義歯装着によるものが多くみられている。刑事6件はすべて有罪であった。

日本歯科医師会医療管理委員会報告書や東京都歯科医師会の昭和43年4月～53年3月の医事紛争例をみ